

板倉鼎・須美子書簡集 目次

口絵

書簡 7

凡例 8

1925(大正14)年まで 9

1926(大正15/昭和元)年 21

1927(昭和2)年 207

1928(昭和3)年 455

1929(昭和4)年 641

1930(昭和5)年～1932(昭和7)年頃 793

註 812

解説・年譜・索引 817

板倉鼎・須美子とその書簡——田中典子 819

板倉鼎・須美子年譜 830

板倉家・昇家系図 840

編者あとがき 841

主要人物略歴・索引 856

もう室中どこをみても画だらけで小サイ会場みたいです。それに室の構造が丁度画をかけるのによく出来てますから日本から荷がつかますと他の方も手伝って家のからっぽの自動車^{グランド}で汗をながして幾度も家へチリ払ひながら運び夜八時頃すつかりお兄さんとキッチンとかざつてしまひました。お兄さんは夕飯すむとお風呂が一つばいになるまで画の前に腰かけていつまでもながめてます。

私が一寸でもそばへいつたらしかられて大変ですからまあ小さくかしまつて一緒にながめてます。

あの大きな果実の静物を見るとお二階がうかんで来ます。そしてよく私はすみにゴミを少しづつためてましたつけ。

もうゴミのたまらない家を考へませう。私は障子のサンのゴミが一等いやです。

弘子さんあのお人形の本箱ではみんなお人形が笑ひながら居るでせうか。日本へ帰るまでにはなるべく変つた面白いお人形を所々で買つたり自分でもつくつてみたりしてたくさんお土産を持つてきますよ。今、真赤な鼻のトガツタ小人のおじさんと、黒ん坊のダンサー娘と、ネコサンのおばけ(フェリックス)^(註)をためました。フェリックスは多分、お送りしたシャシンのベッドの上かにエバリクサツテ、チ

ヨコンと立っていると思ひます。胸の上にFELIXとしてありますよ。

お兄さんの展覧会、五月中頃でせう。未だ会場は皆さんと一緒によい所を決めて下さるのです。

五日ばかり前新聞で色々ホノルルの人にまた紹介しました。新聞といへばホノルルには夕刊しかありません。記事がないのでせう。高橋のおぢさんがフランスへいらした時のお話をうかがふ度に早くこゝをいただきたいと思ひます。米人には少しも深い芸術の頭ありませんから。

ではまた書きますけれど今日はサヨナラ、サヨナラ

50

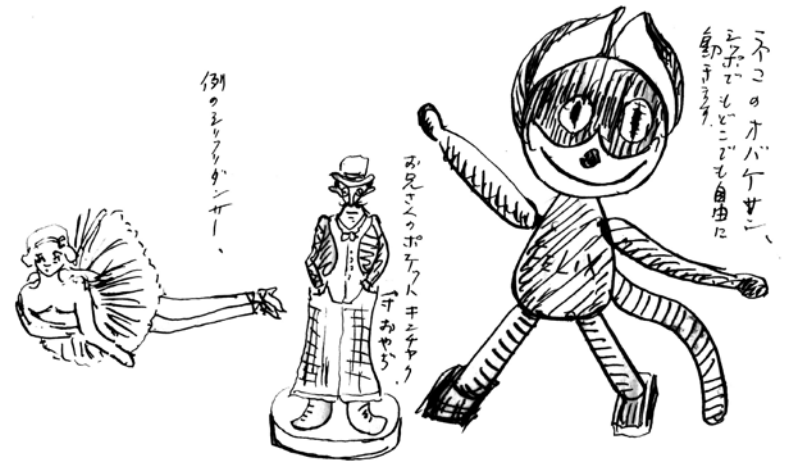
封書 文末5月3日 消印1926年5月3日
松戸、板倉打太郎・勝子宛 ホノルル、鼎

今船が出ます。大急ぎです。

二三日前お手紙二種前後して参り後のガクブチ云々の事あり、一向わけがわかりませんでしたのですぐ電報を打つて置きましたが、今からではどうせ間に合はず已に送つてあるものなら展覧会にフチを作ると無駄になりま

すので困つて居ります。未だ電報の返事も来ません。前に申し上げましたとほり大分距離もあります事故問ひ合せは非常にゆっくりした場合の手紙とよくくの場合の打電の他は一寸迷ふだけで困ります。今月半ばに展覧会を致しますが今になってフチを作る事も出来ず後も来ず迷つて居なければなりません。

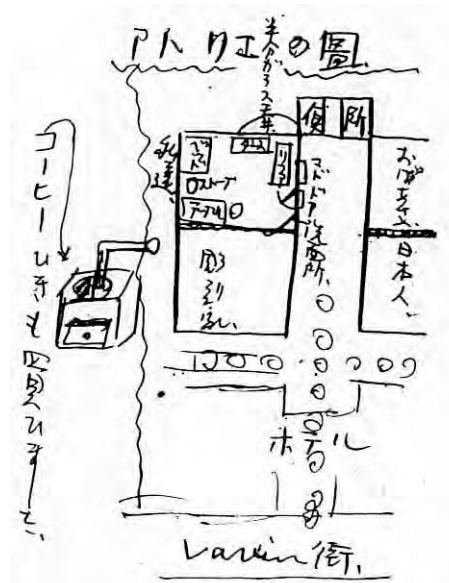
五月一日横浜発の船は九日か十日にホノル、に参りますので若し電報の返事がありません時はそれまでだけ待



例のシリフリダンサー、

お兄さんのポケットキンチャク一寸おやぢ

ネコのおバケサン、シッポでもどこでも自由に動きます。



「ヒール茶わんも二人のだけ、好いのを買いました。お鍋はも少したつて、買ひます。石油らんぷのトテモ、がんばりなのをかひました。女の日本人が、居りませんから、みんな男の人がさういふ事に、くわしいので、一寸おかしくなります。アトリエへ移りましたら、鳥を一羽ほしいと思つて居ります。五銭位でかへます。それから、淋しくない様にラヂオの耳にあて、聞きますのを今日、おとくになつたラヂオ屋から、買つてまゐりました。今居りますパックスホテルでも、森田先生の室にも、澤藤さんの室にもラヂオをおひきになりました。

フランス人の日本人にたいする親切はほんとに感じて居りますが、また、こちらに居る日本人は、知識階級の人とか上流の、人ばかりですから、自然、れい儀が好いのでフランス人は日本人に、敬意をはらひます。後から来る日本人は、ほんとに助かります。また、フランス人の女は、えばらないで、家庭的なところがございませう。ですから、日本人でも、支那人でもフランス人を奥さんにして居る人がずいぶん、ございませう。それに、日本人の男を好む、或るフランス人の女もございませう。

こちらでは日本で名の知れて居る方ばかりにお目にかゝる時が多く、日常のお話しが、もう、普通人とはちがひます。もう、ほとんど、男の方ばかりしか、日本人では居りませんから、余程、シツカリして少し、ガンコな様子をとらないと、トテモ、弱さを見つければは大変でございませう。では、今日はこれで、次に、アトリエの生活をお知らせ致します。

すみ子、

巴里はほんとに、芸術家の天国の様に、画についての何物も、たやすく、得る事が出来、他でみられない物を見る事が出来ます。ほんとに、私達は、感謝して居ります。ほんとに、一生懸命、見てもみつくせないこの芸術を、なるべく、多く、見、自分の勉強を高める心が起つてまゐります。その代り、又、一方、自分は、バカで小さくしようがない気が致します、

何と書きはじめてよいかわかりませんがとにかく私も巴里になれまして、どこからどこまで用が足りるやうになりました。

アトリエも見つかりました。

それよりも忘れてましたが二人とも無事でございませう。

毎日私は午前中をアカデミ（日本の研究処の上等な）で勉強し午後をアトリエ探しと展覧会、博物館等を見るのについでやりました。

90

封書 消印26年
松戸、板倉勝子・弘子宛 パリ、鼎